

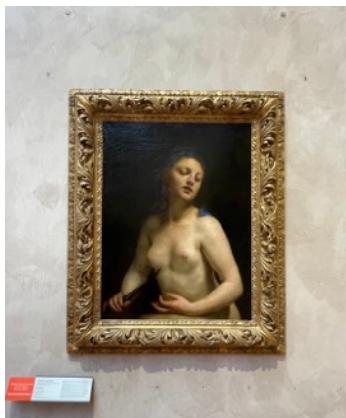
赤峯 光瑠

研修地：パリ

2023年9月3日～2024年3月31日

## 9月から12月、リヨンでの生活

### 1. リヨン美術館 Musée des Beaux Arts de Lyon



「ルクレティアの死」

渡仏して最初の三ヶ月間はリヨンの語学学校へ通いながら、リヨンから行ける近郊の街や都市に赴き、各地の美術館や建築物を見学しました。

月曜から金曜日、朝9時から13時まで語学学校に通い、午後はリヨンの美術館Musée des Beaux Arts de Lyonに何度か訪れました。

中でも心に残った作品はGuido Cagnacciの「ルクレティアの死」という作品です。カラヴァッジョの作品や様式を学んだ彼の作品はドラマティックな構図と美しい光の表現がとても美しく、直接的な表現を避けつつも死を彷彿させる不穏な印象を抱く画面作りはとても参考になりました。

また美術品はもちろん、野外での音楽イベントも数回に渡り行われており、幅広い「芸術」という文化を通じて人々が交流をしている光景はとても新鮮でした。

### 2. リヨンの教会



サン・ニジエ教会



ノートルダム大聖堂

リヨンでは多くの教会にも足を運びました。サン・ジャン大教会、サン・ニジエ教会、サン・ジョルジュ教会、ノートルダム大聖堂などリヨン市内にあるほとんどの教会に足を運ぶことができました。リヨンの最も代表的な教会は小高い丘の上にあるノートルダム大聖堂で、壁や天井一面に施された絢爛な装飾や多くの宗教絵画は圧倒されるものがありました。

ですが私が最も惹かれた教会はサン・ニジエ教会です。



ミサが終わった後のひっそりとした空気と人々が祈りを捧げるために佇んでいる空間の神聖さは観光地として多くの人々が訪れるノートルダム大聖堂とは少し違う神の領域という感覚をひしひしと感じた為です。

またサン・ジャン大教会では14世紀の財宝やミサの際に使われた司祭の衣服や道具が展示されており、こちらも作品制作に非常に参考になりました。

### 3.リヨン文化遺産の日



9月16日は文化遺産の日で、年に1日だけリヨン市庁舎が見学可能になる日でした。リヨンに住む方も普段は入れない場所なので観光客だけでなく現地の方も多く数十分並んだのちに入館し、合計9つの部屋と会議室を見学することができました。

館内はフランスらしい豪華絢爛な内装でまさに「リヨンの栄光」を象徴する建物でした。中でも印象的だった部屋はSalle des armoires 「紋章の間」と呼ばれる部屋で、壁一面に当時の役人の紋章が飾られている部屋です。昔はリヨンの役人の肖像画が飾られていたそうですが火事で焼失してから今の形になりました。紋章のデザインは赤、青、緑、金の配色に限定されていて自然や動物をモチーフにしているものから幾何学的なデザインなど美しく目を楽しませるものばかりでした。

### 4.リヨンのアートマーケット



フランスでは毎週末に蚤の市やマルシェが軒を連ねます。この日はフランスに来て初めてアートマーケットに訪れました。今回は陶芸作品のフェスが開催されており、様々な作家に話を聞くことができました。このようなイベントは日常としてフランスの文化に根付いており、自由で「作品」という枠にとらわれていない作品はどれも生き生きとしたものを感じることができました。

### 5.リヨンビエンナーレダンス



リヨンでは9月に現代美術の祭典が行われます。今年はダンスの年で、デフィレと呼ばれるパレードがショーの目玉になっています。コンテンポラリーダンサーたちが一般市民や観光客を巻き込んで街を闊歩し街は盛大な空気に包まれました。9月のまだ強い日差しが残る中、思い思いのテーマや感情を体を使い表現する様はまさにアートと呼べるものでした。

## 6. フルヴィエールのガロ・ロマン文明博物館とローマダー



フランスはガルー時代にローマに征服されていたことからローマの文化を残す場所が多々あります。リヨンのフルヴィエールにもその名残として紀元前1世紀に建てられた古代劇場の遺跡が残っています。このオデオンと呼ばれる劇場は約一万人も収容可能で今でもコンサートや朗読会などに利用されているとのことです。

このオデオンの近くにはガロ・ロマン文明博物館があり、リヨンで発掘され出土したローマ時代の遺跡が多く展示されています。美しいまま形を保ったモザイク画や彫刻、陶器、コインに留まらず、ローマの文化であった浴場の遺跡や当時の都市計画の一端にも触れることのできる展示となっていました。筋骨隆々でどこか荒々しさを感じる彫刻など、フランスとは違った美に触れられる美術館でした。

またこの日はローマダーと称した小さなお祭りが行われており、当時のローマ人がどのような生活を送っていたのかを主に子供向けに、戦闘の模擬実演、ワークショップ、演劇などのイベントを通して学ぶ場が設けられていました。私たちは島国に生まれたため他国を知ろうとする文化があまりないように感じます。このように過去の歴史や自国のルーツを知り、近隣国との関係などを幼いうちから遊びながら学べる文化はとても素晴らしいと思いました。

## 南フランスへ

### 1. マルセイユへ



10月を迎える今後留学期間をどの地域で過ごすかを考えました。

ニースに住むことも考えましたが、やはりギャラリーの多さや美術に触れる機会が多いこと、またどの都市にもアクセスがしやすいことを考えるとパリに住みたいと思う気持ちがあったため、リヨンに滞在中にリヨンからアクセスしやすい南フランスを訪れることにしました。

一日目はマルセイユに向かいました。

ノートルダム・ドゥ・ラ・ガラド寺院、マルセイユ大聖堂、マルセイユの旧港や街を散策しました。マルセイユに来て驚いたことがストリートアートの多さです。観光地だけでなく路地裏や階段に多くのストリートアートが描かれていました。現地の方に話を伺うとプロのアーティストも無名のアーティストも関係なく作品を制作しておりストリートアート自体が名物に



なりつつあると言っていました。中でも Le Quartier du panier という通りでカゴバックのお店が立ち並ぶエリアは手の届く範囲一面にイラストが施されており、観光客の方々がこぞって写真を撮影していました。

ノートルダム・ドゥ・ラ・ガラド寺院の入り口付近にキリストの彫刻が展示されており、説明書きなどは何もなく、後日調べても詳細がわかりませんでしたが、この彫刻が南フランスに来て一番心に残る作品になりました。寺院の中ももちろん素晴らしい赤と白の大理石で作られたビザンティン様式の建築と、金色に輝くフレスコ画を見る事ができました。

## 2.ニースのエズ村、マントンへ



二日目はニースに向かい、そこから高速バスを利用しモナコ、マントンまで足を運びました。ニースに訪れたのは昔から憧れていたエズ村に行く為でした。

ニースの中心部からバスで40分ほどの場所にある、とても小さな村ですがおとぎ話のような世界が広がっています。美術館があるというわけでもないのですが街そのものがとても美しく、私にとっては創作の源になる街でした。石造りの家と入り組んだ道は迷路のようになっており歩いているだけでとてもワクワクする場所でした。エズ村を散策した後はそのままマントンへ向かいました。オレンジを基本としたカラフルな建物が並び、街を歩くと路上でアート作品を売る人や似顔絵絵師の方もいました。

## 3.シャガール美術館 Musée Marc Chagall



三日目はニースにあるシャガール美術館を訪れました。ニースに来たら必ず来たかった場所です。ここに展示されている作品はシャガール本人がチョイスした作品が展示されており、いずれも大型の作品ばかりでとても見応えがありました。



モザイク画「預言者ユリア」



企画展示の様子モザイク画

またシアタールームはシャガールのステンドグラス作品「天地創造」が燐然と輝き室内はシャガールブルー一色に染まっていました。中庭にはモザイク画の「預言者ユリア」を見る事ができ、時間を忘れシャガールの生涯に浸

ることのできる美術館でした。

私が訪れた期間にちょうど面白い企画展示をしていました。

シャガールの赤い作品の前に椅子が設置され、その椅子にはそれぞれに違うバラの香水を香ることができるボトルが設置しており、ムエットを浸しバラの香りを嗅ぎながら作品を鑑賞する展示でした。情熱的なシャガールの色使いを視覚で楽しみつつ、嗅覚も使うことでより一層作品への没入感を高めることができました。

## 12月から3月 パリでの生活

### 1.オペラ・ガルニエ



グラン・フォワイエ



サンドリーニ夫人の肖像

11月いっぱい語学学校が終わるとパリに拠点を移しました。

パリに来てまず最初にオペラ・ガルニエを見学しました。

この日はあいにくシャガールの天井画がある劇場ホールはクローズされており見ることができなかったのでまた改めて見に行こうと思っています。

シャガールの天井画は見れませんでしたが

大階段やジョルジュ・グランの天井画「バッカスの祭」一面金色の間、グラン・フォワイエなど見ることができました。

精巧な装飾が至る所に施され、グラン・フォワイエはベルサイユ宮殿の鏡の間を彷彿させるほど豪華絢爛でした。また館内にはオペラ座の歴史や建物の構造のレプリカなども展示されておりました。印象的だったのは Edouard Debat-Ponsin の「サンドリーニ夫人の肖像」です。迫力のある大きさの作品で美しい色使いと蠱惑的な視線に魅了される作品でした。

## 2. プティ・パレ Petit Palais



パリには無料で入場できる美術館が何ヶ所かあります。プティ・パレもその一つで1900年、パリ万博の際に建築されその後美術館となりました。ここではパリ市の絵画、彫刻のコレクションや前近代美術や寄贈品を見学できます。

見学を始めて程なくするとWilliam Adolphe Bouguereau の「聖母子と天使たち」を目にしました。この作品はブグローの作品の中でも特に好きな作品で、プティ・パレに所蔵されているとは知らなかつたので実物を見ることができ、とても嬉しかったです。

天使や少女を多く描き残したブグローの描く肖像はひたすらに柔らかく、完璧すぎるほど美しい天使たちとマリアの表情がとても素晴らしいかったです。

また、Gustave Courbet の「眠り」もとても印象に残りました。もつれあうようにして眠る二人の裸の女性はレズビアン的関係を想起させる作品です。リアリズム画家として活躍したクールベは女性の裸体画も残しており、この作品も発表後はかなりの物議を呼んだそうです。

強烈なインパクトを与える構図と満ち足りた女性の表情からセンセーショナルながらも幸福感を感じるとても素晴らしい作品でした。

## 3. パリ近代美術館 Musée d'Art Moderne



パリ近代美術館では様々なモダンアートを楽しむことができました。多彩に変化してきたヨーロッパ美術の流れの中の20~21世紀の現代美術作家の作品を中心に展示が行われています。ローマ風の柱で囲まれた建物は常設展のほかに企画展示ができるスペースもあり、若いアーティストのグループ展示なども行うようでした。



印象に残った作品はJorge Camachoの「La Souverain（意：至上の、類稀な巧妙さ）」、Robert Delaunayの「エッフェル塔」、そしてLéonard Fujitaの「トワル・ド・ジュイの横たわる裸婦」です。

Jorge Camachoの作品は怪しげな箱から真っ黒な少女の手が伸びている作品で箱の中は写真でしか見ることができませんでしたが、とても面白い作品でした。Robert Delaunayのエッフェル塔は鮮やかな色使いと空から見下ろした構図が面白く、この作品のトートバッグやTシャツを身につけた若者を多々街で見かけたことから人気な作品であることが伺えました。Léonard Fujitaの作品は箱根美術館で実際に見たことがありますが、フランスで見るとやはり日本人特有の浮世絵的なタッチと緻密なペン画の対比が西洋の作家にはあまり見ない特徴でとても美しかったです。

#### 4.モン・サン・ミシェル



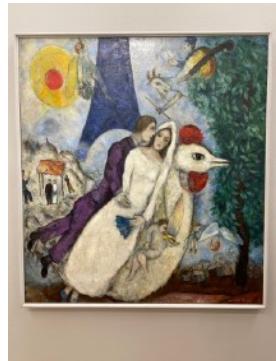
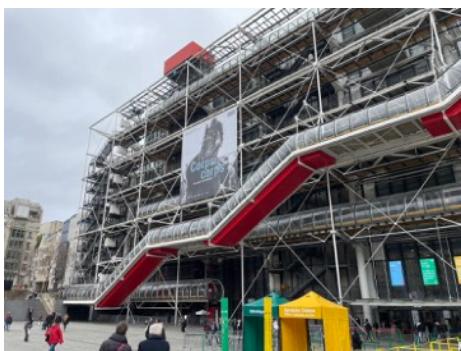
12月にはモン・サン・ミシェルを訪れました。

小高い山の上に建てられていることから、街の中も階段や登り下りが多く、高低差を感じる作りとなっています。伝説によると大天使ミカエルが司教オベールの夢枕に現れ礼拝堂を建てるようにお告げを行いましたが数回にわたる神託を信じなかったオベールに業を煮やしたミカエルが彼の頭蓋骨に穴開け、ようやく神託を信じたオベールによってモン・サン・ミシェルは建設されました。

礼拝堂として利用されたのち、フランス革命の際は刑務所や要塞としても利用された歴史を持ち、美しい建築物でありながらもどことなく暗い影を感じました。

美術作品はほとんどありませんでしたが、ミカエルの神託を受け頭蓋骨に穴をあけられたオベールの彫刻や、美しいステンドグラスを見ることができました。

## 5.ポンピドゥー・センター



20世紀以降の美術作品を扱うポンピドゥー・センターは建物修繕のため2025年から約5年間休館になるそうです。この建物は建物自体がアート作品として扱われるほど非常に面白い作りになっています。マティス、ピカソ、シャガール、ダリ、モンドリアン…名だたる近代美術の巨匠の作品が一同に展示されていました。

中でもシャガールの「エッフェル塔の新郎新婦」、「都市の魂」Le Corbusier の「新しい精神のパビリオンの静物画」、Maria Marcの「クリスマスの天使」が印象に残りました。

シャガールの「エッフェル塔の新郎新婦」はフランスに来たシャガールの幸せそうな絵に見えますが逆さまの天使が持つ燭台に脅かされているように見えることから、革命によりロシアから逃れて来たシャガールの精神的な不安を表しているとも捉えられるということです。その数年後に描かれた「都市の魂」では恐怖や不安を画面全体から感じ取ることができます。色のない世界でわずかに生きる彼の描く美しい動物と最愛の妻によりどうにか立っていられている姿は痛々しく感じました。

Le Corbusier はフランスで活躍した建築家でモダニズム建築の巨匠と呼ばれました。「新しい精神のパビリオンの静物画」は彼の建築家らしい物質的な構造をしてながらもキュビズム的表現が非常に面白い作品でした。

## 6.ベルサイユ宮殿

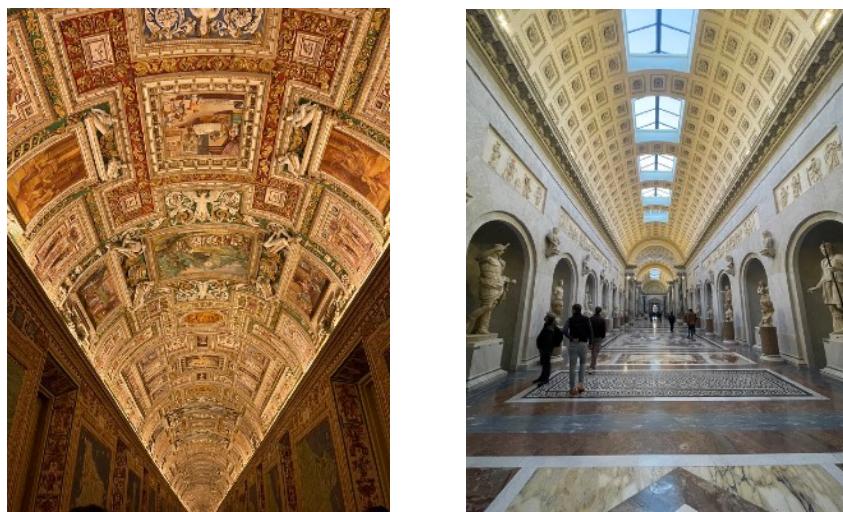


2月はベルサイユ宮殿に足を運びました。

各フロアに多くの絵画が展示されており、宮殿だけでなく美術作品もしっかりと鑑賞することができました。政治的権威を示すために作られたベルサイユは贅沢の限りを尽くしていますが、宮殿内に多くの美術品を所有し、芸術家たちを支援することでフランスの文化芸術を大いに発展させることができました。ルイ14世の肖像や、マリー・アントワネットの寝室、王室礼拝堂、戴冠式の間、鏡の間など当時のフランス貴族の息遣いを感じることができました。

# イタリアへ

## 1.バチカン美術館



せっかくヨーロッパに留学しているのでイタリアの芸術にも触れたいと思い、1月はイタリアへ向かいました。最初に向かったのはローマの中に位置するバチカンのバチカン美術館です。なんといっても膨大すぎる美術品の数に圧倒さ

れました。スケジュール的に1日しか時間が取れませんでしたが、とても見切れない物量でした。



エジプトの棺やミイラから有名な彫刻の数々。また、建物の内装が本当に美しかったです。

目が幾つあっても足りず、気づけば閉館時間まで滞在しました。バチカン美術館の目玉はやはり世界的に有名な「最後の審判」です。

撮影禁止だったので画像に残すことはできませんでしたが、あまりの迫力に言葉が出ませんでした。人間とはここまでものを残すことができるのか。現代のアートには類を見ない人間の限界を感じました。データ化が進み全てのものが簡略化される時代ですが、自分の目指したい「芸術」というものはこういうものだと思い知ることができました。

## 2.ウフィツィ美術館



2日目はフィレンツェに移動し、ウフィツィ美術館に足を運びました。

目当ての作品はAlessandro Filipepi detto Botticelliの「春」、「ビーナスの誕生」

Piero della Francesca の「ウラビーノ公夫妻像」、Leonardo da Vinci の「受胎告知」でしたがほかにも歴史に残る素晴らしい作品がとてもたくさんありました。こちらの美術館も一日では見切れない物量で、天井のステンドグラスも本当に素晴らしかったです。

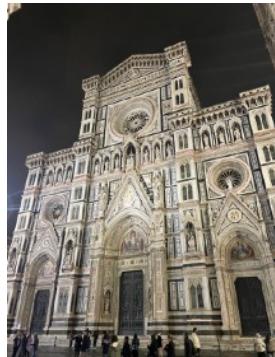
Alessandro Filipepi detto Botticelliの「春」、「ビーナスの誕生」は言わずもかな知れた名画ですが、両作とも想像より大きく圧倒されました。「春」は喜びと春の温かい風を感じるこの作品には500以上の植物と200以上の花で埋め尽くされています。春というタイトルに相応しいまさに生命の息吹を感じる素晴らしい作品でした。「ビーナスの誕生」は「春」と共にメディチ家のために描かれた作品ですが15世紀以降ウフィツィ美術館に移されるまで約300年も忘れ去られていた作品だったそうです。非常に人気のある作品ですが、左右非対称の顔や長すぎる首など厳しい評価もあります。



ですが完璧な美しさよりも少し歪な部分があることで絵としての「魅力」は上がっているように感じました。Piero della Francesca の「ウラビーノ公夫妻像」はイタリアルネサンス時代の最も有名

な海外画の一つで夫人が先に描かれ、婦人は死後に描かれました。婦人の青白く当時の貴族の美を象徴しています。向かいあう二人は当時多く製作されていたメダルに見られる表現を肖像画に取り入れています。Leonardo da Vinci の「受胎告知」は生涯、真作を15点しか残さなかったダヴィンチのデビュー作にして傑作といわれる作品です。ダヴィンチの作品は多くの謎を呼んでいますがこちらの作品も例外ではありません。シンプルな構図ながらもストーリーや登場人物の心情を想起させる素晴らしい作品でした。

### 3.イタリアの教会



イタリアの教会にも何箇所か足を運びました。サン・ティニヤチオ・ディ・ロヨラ教会、サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会、サン・マルコ寺院などを訪れました。

サン・ティニヤチオ・ディ・ロヨラ教会はローマにある教会で天井画は騙し絵

になっており上を見上げると絵画の世界に入り込んだような、どこまでも空が続いているような気分にさせてくれます。

サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会はフィレンツェにある教会で臨時休館だったため中には入れませんでしたが、建物の外観を堪能しました。サン・マルコ寺院はベネツィアの教会で今回のイタリア旅で一番心に残る場所となりました。フランスの豪華絢爛な装飾とは違い、美しいながらもどこか人の温かみや祈りの温度のようなものを感じることができるとても神聖な場所でした。

## まとめ

2023年9月から2024年3月までの活動報告は以上です。

3月からパリでのアルバイトも始まり、慌ただしくも充実した生活を送っております。

街には芸術が溢れ、日々多くの刺激を受けながら製作活動を続けております。フランスは雨が多く、なかなか外での活動ができませんでしたが、4月からは晴れ間も増えてくるそうなので、今後は野外制作や現地のアーティストとの交流を図りながら、鉛筆画だけではない新しい表現を模索したいと考えております。

ヨーロッパが芸術に溢れていることは分かりきっていたことですが、実際に生活をしながら現地で芸術作品に触れることと、日本の美術館で見るとでは大きな違いを感じます。

日本では感じることのできない生々しさや、制作者の息遣いをより鮮明に感じることができるのがしています。日本とはまるっきり異なった生活に悪戦苦闘することもありますが、これほど美術に近しい場所に今自分がいることの素晴らしさを噛み締めながら、残りの数ヶ月間を過ごしたいと思っております。